

令和３年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

通し 番号	2	事業分野：共同制作支援事業
		助成対象団体名：公益財団法人石川県音楽文化振興事業団

助成対象活動に関する評価

（妥当性）

当該活動は、石川県出身の仏教思想家・鈴木大拙（以下、鈴木）と哲学者の西田幾多郎（以下、西田）の生誕 150 年を記念して、鈴木が海外で広めた「禅の心」をテーマとした新作オペラを金沢歌劇座、高崎芸術劇場、オーケストラ・アンサンブル金沢（以下、OEK）が共同制作する事業である。石川県の「ご当地もの」の作品であり、過去にもオペラの共同制作の経験がある金沢歌劇座と OEK が制作の中心ではあったが、両劇場のスタッフが制作過程に関わることでオペラ制作のノウハウを共有し、各劇場が運営するアマチュア合唱団がプロの歌手やオーケストラと共演することで、地域の文化活動の活性化や聴衆拡大にも効果が認められた。

以上のことから、オペラ鑑賞の少ない地方で新作オペラを制作・上演するにあたり、参加団体が連携し適切に役割分担を行って事業が組み立てられており、助成に資する文化的、社会的、経済的意義等が認められる。

（有効性）

当該活動が実施された 2021 年度は東京五輪・パラリンピック開催の年であり、日本文化発信の好機と捉え、「世界に日本文化を発信する新作オペラとして、生きることの意味や希望・光を、芸術文化を通じて改めて問いかけること」を目標に掲げ、外国人客向けにバイリンガルの字幕を作成するなど具体的な取組が行われたことは評価したい。実際にはコロナ禍で外国人観光客の集客は不発に終わり、予定されていた学校へのアウトリーチ活動も実施できなかったが、金沢科学技術大学校が広報活動に協力し、OEK の Twitter を通して公演まで「カウントダウン」形式で情報を発信したり、子供向けの解説ブック「はじめてのオペラ」を作成したり、町なかでの清掃活動を通じて「禅」を PR したりして、当該活動の周知を積極的に行った。その結果 2 会場とも目標値を上回る入場者数があり、金沢公演では完売した「U22」チケット（22 歳以下を対象とした低価格チケット）での入場者の 8 割がオペラ初鑑賞であったという。また金沢の地元新聞の投書欄には、オペラ「禅」の上演をきっかけに地元の偉人について再認識し、鈴木の禅の思想について思いを巡らせたとの投書が複数寄せられた。

以上のことから、当該活動が掲げた目標はおおむね達成したと認められる。

（効率性）

事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。

また、事業費については、おおむね適切であったと認められるものの、要望時の予算額と報告時の実績額との間にかい離があった。今後はより一層実効性のある予算積算と適切な予算管理が望まれる。

（創造性）

オペラ「禅」では中央で活躍する若手歌手がキャスティングされ、金沢を本拠とするプロのオーケストラ OEK が共演するなど、一定の水準に達した演奏が実現した。歌手では鈴木大拙役の伊藤達人が柔らかな美声による自然な歌唱表現と安定感のある演技で一歩抜きんでていた。コロナ禍で来日できなかったヘンリク・シェーファーに代わって指揮した鈴木恵里奈と OEK も、しなやかなアンサンブルで歌手たちに寄り添った。しかし今回作曲された音楽はオペラというよりミュージカルに近い雰囲気、*「Wonderful」*と繰り返す合唱など耳なじみのよい部分はあるものの、表面的な表現にとどまっていた。鈴木や西田が生きた時代背景や周囲の人々との関係が簡潔に表現された台本や演出ではあったが、禅の思想の奥深さや登場人物のリアルな人間像が伝えきれていなかった。

なお、鈴木とマッカーサーが対面するという架空の場面の挿入については、あたかも鈴木がマッカーサーの日本占領政策に影響を与えたかのように描かれ、*「I shall return to ZEN」*とマッカーサーや米兵が歌う場面もあった。鈴木の実績を誇張するような描写に違和感があるとともに、歴史の誤った理解につながらないか危惧された。

以上のことから、意欲的な活動であったと認められるが、音楽・台本・演出に課題も散見された。

（総 評）

コロナ禍でプロのオペラ団体も公演実施に試行錯誤する中、オペラの鑑賞機会の少ない地方で新作オペラを制作・上演した努力と意義は認めたい。地元の学生との協働で SNS を活用した情報発信や、オペラ初心者にもわかりやすい解説書の作成、清掃活動を通じた PR などは非常にユニークで、新たな客層の掘り起こしに効果を上げたことも評価できる。英語の歌詞の挿入、バイリンガルの字幕作成等、外国人客向けの取組も評価するが、国内外での再演を目指すのであれば、オペラ作品としてのブラッシュアップが必須と思われる。「禅」は国際性のあるテーマであるだけに普遍性を持った音楽表現に昇華させてほしい。